

# 東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	藤岡俊樹教授送別の辞
別タイトル	Farewell Professor Toshiki Fujioka
作成者（著者）	杉本, 英樹
公開者	東邦大学医学会
発行日	2023.03.01
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 70(1). p.20 21.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	退任記念
著者版フラグ	publisher
JaLDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.2022 047
メタデータのURL	<a href="https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD45587822">https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD45587822</a>

# 藤岡俊樹教授送別の辞

杉本 英樹

東邦大学医学部内科学講座神経内科分野

藤岡俊樹教授のご退任にあたり、甚だ僭越ですが送別の辞を述べさせていただきます。

藤岡先生は1982年に東邦大学をご卒業後、当時の東邦大学第四内科学教室にご入局され内科研修医として医師の道に踏み出されました。まだ脳神経内科は単一科ではありませんでしたので、そこで広く内科学臨床全般の研鑽を積まれました。私が医師になり入局させていただいた年に藤岡先生が指導医になっていただき、右も左も判らない研修医を手取り足取りご指導いただきましたのを昨日のこのように思い出します。先生は学生時代にはワンダーフォーゲル部に所属されており、登山の時と同じく臨床でも的確な判断を素早く全力で取り組まれておりました。登山の活動は、その後、群馬県冬季登山隊のネパールヒマラヤ山脈アンナプルナ登山に同行医師として参加され、雪焼けで真っ黒なお顔で帰局されたこともあるくらい先生の医師としての人生に密接に関わっています。現在まで東邦大学医学部西穂高診療所の責任者として毎年、夏には西穂高診療所に行かれて診療を行い数多くの登山者を支えてきました。

先生は1995年より3年間米国フィラデルフィアにありますペンシルバニア大学にフェローとして留学され、実験的自己免疫性末梢神経炎のモデルマウスを用いた研究に従事されNeurologyなどの一流誌にたくさんの論文が掲載されました。帰国後は、このモデルマウスを用いた治療的研究を継続され、数多くの学位論文も指導されました。臨床では中枢神経系分野の多発性硬化症や視神経神経炎さらには末梢神経系分野の慢性炎症性脱髄性神経根炎などにおける神経免疫治療の研究で難病の多くの患者さんたちに福音をもたらしました。

現在まで多くの脳神経内科学に関わる学会の役職を歴任されておりますが、先生が理事をされております日本神経治療学会の2020年第38回日本神経治療学会学術集会を主催され、会長講演として先生のこれまでの成果をまとめられてご発表されました。本学術集会が盛況のうちに大成功となりましたことは、我々スタッフ一同、一生の思い出と

なっています。

先生が2008年に教授になられてからの教室の診療方針は、患者さんの希望を最大限生かして先進医療に取り組むという藤岡イズムにつきます。その前に大変大切なのが詳細な神経学的な診察による正確な診断であります。先生はいつも回診で黒のドクターバッグに打鍵器や音叉を入れて丁寧に診察なさっていたのを思い出します。回診での学生指導でも神経疾患を罹患している患者さんを広く内科的な視野から把握して治療することができるように指導していらっしゃいました。先生が指導をするときにいつも伝えていることは脳神経内科とは内科的な広い視野から症状を考えることによって正確に診断ができると説明されていたのを思い出します。画像に頼るのではなく最も大切なのは患者さんからの生の診察所見に尽きるということを教室員一同にも教えて頂きました。

また、地域医療連携にも熱心に活動され社会貢献として世田谷認知症ネットワーク・目黒区認知症ネットワーク・TOHO Fabry Network・田園都市線沿線医療機関による認知症研究会・区西南部パーキンソン病研究会などを主催・運営してきました。神経難病患者特有の在宅診療体制を立ち上げるべく、学会なども通じて難病専門看護師の育成の重要性というテーマで難病専門看護師が中心となって多職種が連携していくモデルの確立に努めました。イギリスなどで実践されているパーキンソン病ナースなどがまさにそうですが、難病患者というとらえ方ではなく、パーキンソン病の患者さんであればPepole with PD (PwP)という言葉からもわかるように一人ひとりの患者さんは、たまたまパーキンソン病を罹患した人間であるという考えのもと患者さんに寄り添い全人的医療を実践されておりました。

先生はこれまで旧第四内科の創設者であります里吉・木下両教授の難病疾患治療に対するチャレンジ精神を継承されてきました。今後先生が退任されていなくなるのは大変さみしい限りではありますが、残された我々教室員が一丸

となって東邦大学脳神経内科発祥の教室を守っていきたい  
と考えています。藤岡俊樹先生，長きにわたりありがとう  
ございました。